

中学校用教科書ガイドにおける発音表記の扱い

English Pronunciation Transcription in Learning Guidebooks for Junior High School Students

河内山 真理* 有本 純**

Mari KOCHIYAMA Jun ARIMOTO

抄 録

本研究は、中学校用の教科書ガイドにおいて、どのような発音表記が用いられているかを明らかにすることを目的としている。1 年次用の教科書ガイドのすべてがカタカナによる表記を用いており、またこの表記法は出版社によって差異があった。同様に中学生を主たる対象にした初級英和辞典でも多くが異なったカナ表記を用いているため、ガイドと辞典の出版社が異なると、学習者が混乱する可能性が非常に高いという問題点が浮かび上がった。辞典も併用するなどの熱心な学習者ほど混乱する可能性があり、主として自宅学習に用いられる教材としては、厄介な問題を抱えていると言える。また、学校での指導者たる教員は、こうした学習参考書の現状を補う発音指導を行うことが必要になるだろう。辞典の出版社が共通認識を持つことも必要と考えられる。カナ表記そのものが教科書では用いられておらず、継続性がないという事実が、学習上の大きな問題であり、その点からも発音記号を指導しておくことが必要と考えられる。

1. はじめに

本研究は、中学生の自宅学習の手助けとなる教科書ガイドで、発音表記がどのように扱われているのか、その問題点を明らかにすることを目的としている。なお本稿は、2016 年 8 月 20・21 日に獨協大学で開催された全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会での口頭発表に基づいて、加筆修正している。

現行の学習指導要領において、中学校の英語の音声指導については、言語材料として「現代の標準的な発音」を用いること、「語と語の連結による音変化」「語、句、文における基本的な強勢」「文における基本的なイントネーション」「文における基本的な区切り」「発音と綴りを結びつけること」などを示している。

中学校用の検定教科書（以下、教科書と略記）は 6 社から発行されているが、上田・大塚 (2010) でも指摘されているように、発音の取り扱いにはばらつきがある。1 年生用の教科書では、各レッスンやユニットのページ下部や横に示される新出語のリストに発音記号は示されておらず、2 年生以降に発音記号が示されるようになっている。ただし、巻末の単語リストには、1 年生用でも発音記号は示

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

されている。また、発音の仕方を図示してまとめている教科書もあるが、説明のない教科書もあり、教科書によって差があるのが現状である。教科書の場合は、授業で用いられるため、教員による指導でその過不足は埋めることが可能である。一方、生徒が自宅学習の参考に用いる教科書ガイドは、そこに説明されている内容と、それに対する学習者の理解力に依存している。本稿では、教科書ガイドの発音表記方法と説明等について比較を行い、その問題点を検討する。

2. 教科書ガイドの発音表記

2.1 教科書ガイドの種類

2016 年（H28 年度版）の中学校用教科書と教科書ガイドは、表 1 に示すように 6 種類である。準拠している中学生用の辞典がある場合には、右欄に示している。この 6 種類の教科書ガイドについて調査を行った。

表 1 中学校用教科書・ガイド(1 年生用)・および準拠の辞典

教科書名	出版社	ガイド出版社	中学生用辞典
New Horizon	東京書籍	あすとろ出版	ニューホライズン
New Crown	三省堂	三省堂	初級クラウン
Sunshine	開隆堂	開隆堂	サンシャイン
Total English	学校図書	学校図書	-
One World	教育出版	日本教材システム	-
Columbus 21	光村図書	光村教育図書	-

2.2 発音表記の方法

6 社の教科書ガイドでは、すべてカタカナによる発音表記を用いており、発音記号を用いていたのは 1 社だけである。カナ表記についても、どういう音をどの表記で示すかという説明がある場合と、ない場合があり、さらには各社で微妙に異なる表記が用いられていた。また各社とも用いられているカナ表記は「あくまで目安」であり、CD 等での確認するようにという注意が添えてあった。

表 2 各教科書ガイドにおける発音表記についての説明

ガイド	New Horizon (NH)	New Crown(NC)	Sunshine (S)	Total English (TE)	One World (OW)	Columbus21 (C)
説明		○		○		○
一覧表		○			○	
発音等のコラム (取り扱い項目)	○ 発音記号(一部訛号と調音法示す)	○ prosody 発音記号なし	○ 発音クニック 発音記号なし		○ 発音記号と カナ表記	

発音の手がかりとしてカナ表記を用いているが、日本語とほぼ同じあるいは近い音の場合はそれほど問題はないが、日本語にない音をどのようにカタカナで表記するかが大きな問題であり、学習者の誤解を生じかねないところである。

このカナ表記を、新出単語に付けているのは6種類とも共通しているが、さらに、2種類は教科書の本文すべてにカナ表記を付けていた(図1,2参照)。

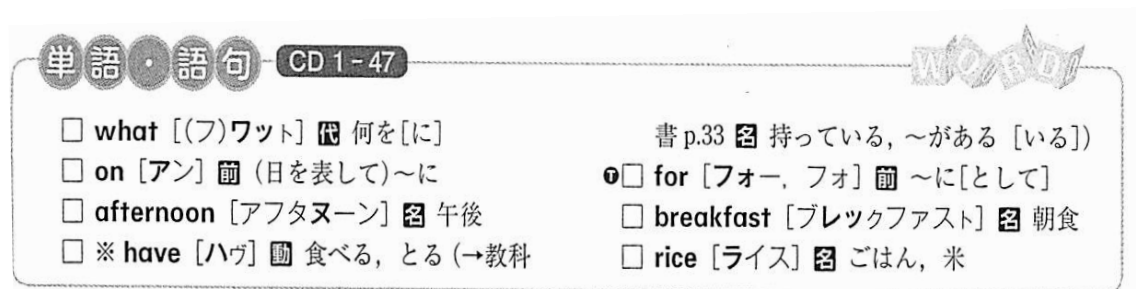


図1 新出単語へのカナ表記の例(教科書ガイド サンシャイン1年より)

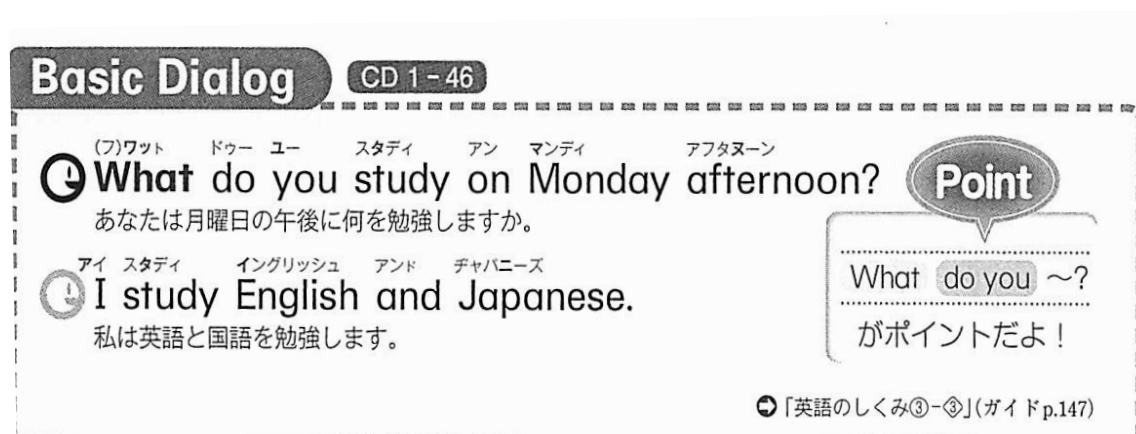


図2 本文のカナ表記例(教科書ガイド サンシャイン1年より)

しかしながら、教科書ガイド(以下、ガイドと略記)においては、発音を表記するためのカナ表記の独自性に加えて、そのルールを説明するページが設けられていない場合もあった。さらに、元の教科書本体に発音記号や発音の仕方について説明がある場合は、その内容と、ガイドで用いているカナ表記との関係が示されておらず、時には矛盾を起している例も見受けられた。

たとえば、「[l]は舌先を上歯ぐきにつけて「ル」と読みますが、[ɹ]は舌先をどこにもつけないで「ル」と読みます」のように、同じ「ル」を用いている一方で、ガイド独自のカナ表記について[l る]、[ɹ ル]と、表記が混在している。まじめに取り組んだ場合に学習者が混乱することは必至である。

カナ表記、すなわち日本語の文字を使って英語の発音を表記しようとする際に、もっとも問題となるのが、日本語にない音をどう表記するかという点である。

母音/æ/と、語末の閉音節/kæt/については、表3のような表記が用いられていた。これに従うと、

同じ cat という単語に対して、キャト、キャ^ト、キャ_ト、キヤトなどの異なった表記になる。

表3 日本語にない母音と語末閉音節の表記

発音 \ ガイド	NH	NC	S	TE	OW	C
[æ] (例 apple)	あ	ア	ア	ア	あ	ア
[ɒ] (例 first)	ア～	ア～	アー	アー	ア～	ア～
語末の閉音節	上付小文字		下付小文字			

子音については表4に示す。通常、日本語にない音に対しては平仮名を用い、類似音がある場合は、日本語に近いものにカタカナを、遠い音に平仮名を当てている。ここで特例的なものは Japanese に用いられる[dʒ]である。One Worldを除いて、他の5種類は、「ヂ」を用いている。これは、日本語のジと英語の[dʒ]が音声学的には異なる音であることを踏まえて、あえて表記しているものと推察される。

表4 カナ表記における日本語にない子音の表記

発音 \ ガイ	NH	NC	S	TE	OW	C
[f] (例 five)	ふ	ふ	フ	フ	ふ	ふ
[v] (例 five)	ヴ	ヴ	ヴ	ヴ	ぶ	ヴ
[θ] (例 three)	す	す	ス	ス	す	す
[ð] (例 this)	ず	ず	ズ	ズ	ず	ず
[dʒ] (例 Japanese)	ヂ	ヂ	ヂ	ヂ	ジ	ヂ
[r] (例 really)	リ	リ	リ	リ	リ	リ
[l] (例 really)	り	り	リ	リ	り	り

具体的な表記例を表5に示す。このように同じ英単語であっても、教科書ガイドによってカナ表記が少しずつ異なっていることがわかる。

表5 カナ表記を用いた単語の表記例

単語 \ ガイ	NH	NC	S	TE	OW	C
apple /æpl/	[あぷる]	[ア ^プ る]	[ア _プ ル]	[ア _プ ル]	[あぷる]	[ア _プ る]
math /mæθ/	[マ ^ァ す]	[マ ^ァ す]	[マス]	[マス]	[マ ^ァ す]	[マ ^ァ す]
thank /θæŋk/	[さあ _ン ク]	[さ _ン ク]	[サン _ッ ク]	[サン _ッ ク]	[さあ _ン ク]	[さ _ン ク]

3. カナ表記の使用上の問題点

3. 1 教科書ガイドのカナ表記

カナ表記そのものは、学習者が直感的にカナを読めば近い音がわかるという点では、手がかりとしては使いやすく、親しみやすいかもしれない。しかしながら、英語の発音を理解するという点においては、問題を抱えている。

まず、解説を読まなければ区別できない表記があるという点である。[ɹ]と[l]を[ル]と[る]として表記上区別したとしても、実際に音としてどう異なっているのかはわからない。th や母音も同様の問題が生じる。区別がしにくい発音表記の例を表6に示す。

表6 区別しにくいカナ表記の例

単語 \ が付く	NH	NC	S	TE	OW	C
hat /æ/		[ハト]	[ハット]	[ハット]	[ハット]	
hot /ɑ/	[ハット]	[ハト]	[ハット]	[ハット]	[ハット]	[ハット]
light /l/	[らイト]		[ライト]	[ライト]		
right /r/	[ライト]	[ライト]	[ライト]	[ライト]	[ライト]	[ライト]
sing /s/		[スインベ]	[スインヅ]	[スイング]	[スインベ]	[スイング]
thing /θ/	[スイング]	[スインベ]	[スインヅ]	[スイング]		[スイング]

例えば、最初の二欄では hat と hot は母音が異なる最小対の単語であり、母音だけがその差を生む。しかし、New Crown でも、Sunshine でも、Total English でも、この2つの単語はカナ表記では差がない。唯一、One World だけが違いがあることがわかるが、どのように調音するのかは不明である。次に、二組の最小対となる単語 light と right、sing と thing についても示す。New Horizon では表記上、[ら]・[ラ]という違いがあるが、これが実際の音としてどう違うのかは、解説がなければわからない。中学生でなくても、日本語を読める人間がカタカナと平仮名のラ行に対して異なる音を当てていることはない。表中の最後の最少対は/s/・/θ/であるが、[す]・[ス]という表記の差違はあるものの、学習者に対して何も調音上の相違を示していない。

類例として、日本語の表記上用いられはするものの、v に対する「ヴ」は、発音上、日本語話者が「ブ」と区別して発音しているかという点とそれもない。「バニラ」と「ヴァニラ」は表記上の違いはあっても、発音上は同じである。

さらには、Japan や Japanese に対して使っていた[ヂ]と[ジ]であるが、日本語母語話者で、現在この2音を識別して発音しているものは中学生の世代にはまずいないと思われる。すでにこの2音が同化して久しく、アナウンサーであっても区別して発音してはいない。編集者の苦心あるいは工夫は理解できるが、実際の日本語表記の中で「ジャパン」と用いられているものを、わざわざ[ヂャパン]と書いても、中学生が区別して発音するとは考えにくい。カナ表記は、日本語を用いているために、かえって

解説を読んだりせず、そのまま素直に日本語発音で読んでしまう可能性が非常に高い。つまり、日本語にない音は、ガイドを用いても自習としての学習はできないのである。

しかも、ガイドでカナ表記の解説が十分ではなく、説明のないガイドもある（表7）。説明があったとしても、「[s]はサ行音、[z]はザ行音、[ʃ]はシャ行音、[ʒ]はジャ行音」としか書いていない（Total English）場合もあり、音がどう違うのかは解説されていないため、表記上の差しかわからない。ニュークラウンの場合は、「ル room[ルー^h] 舌先を上に向ける」などの簡単な発音方法の説明が載っている。

表7 発音の表記に関する説明の記載

ガイド	NH	NC	S	TE	OW	C
説明		○		○		○
一覧表		○			○	

3. 2 初級者用辞典との整合性

教科書ガイド間での齟齬があったとしても、通常学習者は自分の学校で用いられている教科書に準拠したガイド1種類しか用いないので、ガイド間での差は、実際の学習者にとってあまり問題ではないとも言える。

しかし、ガイドに加えて、学習参考書として辞典を用いて学習する場合には、問題があることがわかった。中学生向けの初級者用英和辞典6種類（ニューホライズン英和辞典、初級クラウン英和辞典、サンシャイン英和辞典、ハウディ英和辞典、プログレッシブ英和辞典、チャレンジ英和辞典）を調べた。初級者用英和辞典は、ガイド同様、カナ表記を併用しているからである。辞書の場合はカナ表記だけではなく、通常の発音記号も一緒に示しているが、学習者はわざわざ習わなければ読めない発音記号よりは、日本語の知識を用いてそのまま読めるカナしか見ない可能性は高い。しかし、このカナ表記が辞典間で異なっており、ガイドとも異なることが学習者の混乱を招く原因となる。表8に例示するように、たとえばappleというカタカナでも知っている初心者向きの単語でも、教科書ガイドでは6種類中2種のみが一致し、初級者用英和辞典においては6種類中同じ表記は使われていない。ガイドと辞典での重複は、ニューホライズン、ニュークラウンと初級クラウンが同じ出版社からの同名を冠した書籍であるせいか、一致している。ところが、同じ条件でも、教科書ガイドのSunshineと辞典のサンシャインでは[アプル]と[ェァゥ]となっており、カナ表記が全く異なっている。このサンシャイン英和辞典は、カナ表記でもかなり特殊な表記方法を用いており、他の辞典やガイドとは大いに異なっている。辞典の場合は、表記法のルールについて、巻頭に説明があるのが普通だが、そのルールをよく読んでおかないと、教科書ガイドの場合と同様に、カナ表記であるがゆえに日本語の音として英単語を認識してしまうことになる。

表8 初級者用辞典と教科書ガイドでの発音表記例

ガイド	NH	NC	S	TE	OW	C
apple	[あぷる]	[アプ ^ろ]	[アプル]	[アプル]	[あぷる]	[アプ ^ろ]
初級者 用辞典	ニューボライズン	初級クラウン	サンシャイン	ハデ ^ィ イ (講談社)	プログレッシブ (小学館)	チャレンジ (Benesse)
apple	[あぷる]	[アプ ^ろ]	[^エ アプ ^ウ]	[アプル]	[マ ^ァ す]	[あーぷる]

ここで指摘できることは、教科書ガイド、英和辞典の表記が一致していないこと、その不一致が学習者を混乱させる可能性が、様々な参考書を用いたり、よく内容を読み込もうとする熱心な学習者ほど高くなる可能性が推察できることである。

3. 3 学習上の問題点

発音記号については、検定教科書も1年次は用いていないが、2年生からは記載されている。1年次に教科書ガイドでカナ表記を学んでも、2年次からの教科書の発音記号とは、学習者が自分で結びつけなければならない。初級者用辞典は当初からカナ表記と発音記号の併用であった。しかし、高校生以後に使用する中上級者用の辞典では、発音記号のみになる。中学時代にカナ表記をマスターしたとしても、高校で用いられる辞典にはカナ表記は使われておらず、当然教科書や高校用の教科書ガイドでも用いられていない。カナ表記は手がかりとして有用かもしれないが、その後の発音学習には持続性を持たないことが問題であろう。

また、カナ表記自体が、前述したとおり、書籍によって異なるルールの下に作成されており、共通の規則性を持たずに用いられていることも、学習者の混乱を招く原因となっている。

長期的な視野に立てば、カナ表記は、どれだけ工夫をしても、英語の発音習得には無理があると言わざるを得ない。中学1年生である書籍に従ってカナ表記を学習しても、それは英語らしい発音とは異なるだけでなく、そのカナ表記は中学2年生で教科書に用いられる発音記号とは異なるため、学習し直す必要が出てくる。発音上も、カナを用いているために英語として適切な発音は表現しきれず、学習者が日本語の音のまま英語を発音し、英語らしい音あるいは通じる発音を学習することはできない。カナ表記を学ぶよりは、中学1年から2年の間に、必要最低限の発音記号を学ばせ、適切な発音の方法や音を指導しておく方が、自律的な学習者を育成することにつながる。

4. 自宅学習と補い合う学校教育

発音の学習は、他の学習と比べても自宅学習が困難だという特性がある。即ち、カナ表記を見ながら単語や文を発音しても、それが通じる発音になっているのか、矯正すべき問題を含んでい

るのか、学習者には判断できないからである。例えば、リスニングの自習では、聞いて分からない場合、聞き直したりスクリプトを確認したりすれば、問題の箇所を確認することができる。カナ表記は、あくまでも日本語の音を表しており、英語の音声の近似的な表記であり、実際の音とは異なっている。また、日本語の特性である開音節（音節が母音で終了する）は、常に英語の発音に対して悪影響を及ぼしており、通じない発音を生じさせる原因となっており、カナ表記の限界とも言えよう。

学習者にとって、混乱を招きかねない現状を救うためには、学校の教育現場での指導が不可欠である。授業では、英語の発音について、日本語と比べながら必要最低限の指導をしておくべきである。2 年次以降の学習のために、発音記号についても指導することが望ましい。必要最低限の発音記号としては、①アルファベットにない記号の発音、②アルファベットと同じだが音価が異なる記号、③日本語にない音価をもつ記号である。これに加えて、発音記号ではないが、重要な要素である④プロソディとして、文強勢、音声変化、音調の基本パターンを授業で指導すべきであろう。①～③の具体的項目は以下の通りである。

- ① th/θð/, sh/ʃʒ/, -ng/ŋ/, 破擦音 /tʃdʒ/ 母音 /əʌ/
- ② 綴り字 j vs. 発音記号 /j/
- ③ 子音 /fvrl/ 母音 /æɑʌ/

5. おわりに

本稿で検討した通り、カナ表記には一定のルールが存在せず、ガイドや辞典によって様々な表記法が存在していることが判明した。学習者の立場からは、カナ表記のルールの不整合は早急に改善すべき問題であろう。仮に、表記法の改善がなされたとしても、カナ表記による発音学習では、英語によるコミュニケーションに必要な「通じる発音」を習得することには程遠い結果となっている。ガイドや初級者用辞典を含めて、学習者を混乱させるばかりでなく、上級学年や高校への継続的な学習とならない点でも大きな問題が残る。

これまで、発音についてどのような表記法や説明がなされているのかを、中学検定教科書、学習者用の教科書ガイド、初級者用辞典と調査を進めてきた。今後の研究課題として、指導者用の教授資料も、調べる必要がある。指導書は、教員が授業を組み立てる際に参考とする資料であるが、そこで、生徒にわかりやすく伝える発音などを扱っていれば、発音指導に自信がなく消極的な教員も指導しやすくなる。過去にはカナ表記を用いて説明している場合も散見された。また高校の教科書や教科書ガイドではカナ表記はほぼ見当たらないが、2017 年度から高校の検定教科書が変わるので、それについても確認する必要がある。

謝辞 本研究は、科学研究費助成金（基盤 C 一般：課題番号 16K62869）の助成を受けて行った。

参考文献

- 上田洋子・大塚朝美 (2010) 「発音と音声のしくみに焦点を当てた中学校英語教科書分析ーインプットの基礎を考察するー」『大阪女学院大学紀要』 7, 15-32
- 有本 純・河内山真理 (2015) 「中学校検定教科書関連書籍における音声表記の問題点」『第 41 回全国英語教育学会熊本研究大会発表予稿集』, 346-347
- 河内山真理・有本 純・中西のりこ (2013). 教職課程における英語発音指導の位置付け *Language Education & Technology*, 50, 119-139
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝巳 (2011). 小中学校教員の発音指導に対する意識ーアンケート調査による考察ー 『LET 関西支部研究集録』 13, 57-78

分析に使用した教科書ガイドおよび初級英和辞典

教科書ガイド 東京書籍版ニューホライズン 1 年、あすとろ出版

教科書ガイド 三省堂版ニュークラウン 1 年、三省堂

教科書ガイド 開隆堂版サンシャイン 1 年、開隆堂

教科書ガイド 学校図書版トータルイングリッシュ 1 年、文理

教科書ガイド 教育出版版ワンワールド 1 年、日本教材システム

教科書ガイド 光村図書版コロンブス 21 1 年、光村教育図書

青木昭六・島岡丘監修 (2015) 『サンシャイン英和辞典 全面改訂版第 4 版』 開隆堂

橋本光郎編 (2012) 『Challenge 中学英和辞典』 Benesse

笠島準一監修 (2011) 『ニューホライズン英和辞典 第 7 版』 東京書籍

田島伸悟編 (2012) 『初級クラウン英和辞典 第 12 版』 三省堂

吉田正俊・中村義勝編 (2011) 『ハウディ英和辞典 第 4 版』 講談社

吉田研作編 (2014) 『プログレッシブ中学英和辞典』 小学館

Abstract

This research has examined how English pronunciation is expressed in learning guide books corresponding to junior high school authorized textbooks. In the first-year textbooks phonetic alphabets are not shown in the word list of each lesson, while the second-year books start to use the phonetic symbols. In the guidebooks all of 6 books use *katakana* transcription instead of phonetic symbols. Each book has different rules to describe English pronunciation with *katakana*.

For students *katakana* is easy to understand and they may read *katakana* transcription without learning rules. *Katakana*, however, cannot describe the precise pronunciation and may allow students to learn wrong pronunciation. Another problem is the English-Japanese dictionaries for junior high school students adopts different transcription may confuse students. Even if students learn how *katakana* shows English sounds, they have no chance to use *katakana* transcription in the textbook. As the textbooks use phonetic alphabets, students should learn phonetic alphabets instead of *katakana*, which will lead them autonomous learners.